駒澤地理 No.42 pp. 5 ～10, 2006
Komazawa Journal of Geography

地理学科の歴史を記念すること
――駒澤大学地理学科創立75周年記念事業を例に――

小田匡保*

On Commemorating the History of the Department of Geography: An example of the commemoration program of the seventy-fifth anniversary of the Department of Geography, Komazawa University

Masayasu ODA

駒澤大学文学部地理学科は，2005年２月に学科創立75周年の記念式典や記念誌の発行を行なった。本稿では，この記念事業を，地理学に関わる組織の「記念」の一例と位置づけ，「お金」と「人」の面から若干の考察を行なう。そして，大学からの補助金に助けられた面が大きいこと，現在約60～70歳代の卒業生の参加率が非常に高かったことなどを指摘する。この種の事例を比較検討することによって，国立（公立）大学法人と私立大学の違いや各大学の特色も明らかになってくるはずである。

キーワード：記念，歴史，地理学科，駒澤大学
Keywords: commemoration, history, department of geography, Komazawa University

Ⅰ．はじめに

1929（昭和４）年４月に駒澤大学専門部に歴史地理科が設置されてから，2004年度で75周年を迎えた。駒澤大学文学部地理学科では，これを学科創立75周年として，2005（平成17）年２月に記念式典や記念誌の発行を行なった。筆者も現職教員として，この事業に携わった。本稿は，この経験をもとに，地理学科の歴史を記念することについて，若干の考察を試みるものである。

Ⅱ．地理学における「記念」研究

周知のように，「記念」や「記憶」については，近年，歴史学などの諸学のみならず，地理学でも議論が行なわれている。これに関しては，米家[1]が，英語圏の文献も含めて地理学（特に歴史地理学）の研究動向を的確にまとめており，学ぶべきところが多い。それも参考に，「記念」や「記憶」に関する議論のどこが地理的かを考えてみると，１つには，「記念」するもの，「記憶」するものが特定の場所や地域の出来事やそこの歴史であり[2]，特定の場所や地域にこだわるという点で地理的であると言える。２つめには，「記念」するために作られたもの，「記憶」を形にしたものが，記念碑や記念の施設・建物，記念植樹のように，具体的な景観として現れるという面でも地理的である。「記念」・「記憶」に関

*駒澤大学地理学教室

する議論は，少なくともこれら２つのどちらか一方を満たせば地理的なテーマということになる。

逆に，この２つのどちらにも当てはまらない場合，一般的には地理的ではない。すべての事象は空間的次元を持つと考えるならば，前者のような，記念するものが特定の場所や地域に関係があるという点に該当しないケースはないとも考えられるが，たとえば企業や組合，学校，学会のような組織や集団，あるいは個々の人間の歴史を記念することは，必ずしも組織が立地してきた場所，あるいは個人の生きてきた場所の歴史を記念することではない（また，インターネット上に形成されるバーチャルな組織は，空間性が非常に小さい）。法律・制度のようなものの歴史を記念することも，特定の場所・地域にこだわるとは言えない。具体的な景観として現れるという後者の面でも，記念の方法にはいろいろあり，記念誌のような本を作る，記念メダルのような景観とは言えない小さな品物（記念品）を作る，記念の行事を行なうなど，それ自身はあまり地理的とは言えないやり方がたくさんある。

しかしながら，それらの中でも，地理学に関わる組織（たとえば学科・学会・研究会）や地理学に携わる個人（研究者など），地理学に関係する制度などを記念することは，記念の仕方がどうであれ，やはり地理学の研究対象となしうると考えられる。実際のところ，日本の地理学界では，学会組織の創立何周年記念事業，あるいは教員の退職に際しての記念事業がしばしば見られ，またこれらと並んで地理学教室の創立何周年という事業もある。本稿で扱う駒澤大学地理学科創立75周年記念事業は，「記念」・「記憶」をめぐる議論の中で，以上のように位置づけられると考えられる。

ただし，この種の研究が，地理学のどの下位分野に入るのかは判断に迷う。筆者には特にこだわりはないが，地理学史研究になるのか，歴史地理学なのか，また新しい領域を考えるべきなのか，後考を待ちたい。

Ⅲ．地理学科創立75周年記念事業の内容と経緯

地理学科創立75周年記念事業の内容は大きく２つあり，１つは記念誌[3]の発行，もう１つは記念式典・記念講演会，祝賀懇親会という一連の記念行事である。記念誌は，「地理学科75年の歩み」，「地理学科の記録」（解説と図表），「地理学科に関する資料」（図表データのみ），「思い出の記」の４章から成り，付録として写真集や卒論題目などを収めたCD-ROMを付けている。全部で304ページのけっこうボリュームのあるものである。それに加えて，「Komazawa Geography」のネーム入りのオリジナルバッグを作成した。

記念事業の経緯については記念誌にも記してあるが，2002年末に地理学科75周年記念事業委員会を設置し，まず，記念誌に掲載する「思い出の記」の原稿を卒業生から募集した（2003年12月締切）。2004年５月には記念事業の大要を公表し，記念式典・懇親会参加，記念誌購入の受付を開始した（７月締切）。この間，現職教員による資料収集と記念誌原稿の執筆・編集，オリジナルバッグの作成作業を進めた。

記念式典は2005年２月19日（土）午後２時より駒澤大学記念講堂で行なわれ，引き続いて午後２時40分より中村和郎教授による記念講演会「地図からの発想 ―三島の水はなぜ涸れたのか―」があった（中村教授は2004年度に定年退職で，最終講義を兼ねていた）。式典会場３階ロビーには，地理学科ゆかりの写真パネルを展示した。同日午後５時からは，渋谷エクセルホテル東急で祝賀懇親会を行なった。記念誌とオリジナルバッグは記念式典の受付で配布し，欠席者には後日送付した。記念誌は『駒澤地理』の別冊としたので，雑誌交換を行なっている全国の大学や研究機関などにも送られている。

Ⅳ．若干の考察

以下の考察にあたっては，地理学科創立75周年記念事業を，地理学科の結束を固めるのに貢献したとか，記念誌の発行によって「歴史」を作ったというような結論には持っていかず，記念事業遂行の実際的な面から考察してみたい。具体的には，「お金」と「人」の面，つまり，どこから資金を調達し何に使ったか[4]，誰が記念事業を担ったのかの検討をしたい。

まず金銭面から考察する。決算によれば，収入の約半分が懇親会参加費と記念誌代[5]であり，約半分が大学からの補助金である。一方，支出は，半分近くが懇親会開催費で，次に多いのが記念誌発行費である。懇親会参加費・記念誌代の収入だけでは支出の約半分しかまかなえず，大学からの補助金を得られたことが，この記念事業の遂行にとって大きな手助けとなっている。逆に考えると，大学からの補助金がなければ，より多くの参加費・記念誌代を徴収するか，懇親会・記念誌の規模を縮小せざるをえなかったということである。ただし，多額の補助金を得られたのは，これまで学科創立記念事業をまったく行なわなかったことによるものであり，今後，同様の事業を企画しても，大学側に多くの援助を望むことはできない。なお，具体的な収支金額については，昨年度のことで支障もあると思われるので，収入・支出ともに総額約700万円という数字にとどめておく。

次に，75周年記念事業に関わる人，すなわち誰がこの事業を担ったかという点について考察する。活動の中心となったのは現職の地理学科専任教員（特に駒澤大学出身者）である[6]。記念事業委員会は，在職年数が最も長く，かつ年長の小池一之教授が委員長となり，他に駒澤大学出身教員５名，計６名で構成された（当時の学科主任は駒澤大学出身ではなく，委員会の委員ではなかった）。記念事業委員会の決定事項は地理学科専任教員の会議（学科会議）で報告・審議され，了承された。各種の準備作業は記念事業委員会のメンバーが中心になって行なったが，記念誌原稿の執筆は専任教員で分担した。また，大学院生・学部生の手伝いも仰いだ。一方，卒業生は企画・準備には直接関与せず（選択肢としてはあったが），記念式典・懇親会への参加，記念誌の購入，記念誌の原稿執筆という形で関わった。

卒業生のうち，どの年代の参加が多かったかを見てみたい。記念式典・懇親会参加予定者数[7]を卒業年代別に数えると，絶対数では1960年代卒業の参加者数が最も多い（表１）。ただし，卒業者数は1968

表１　記念式典・懇親会参加予定者数

卒業年（暦年）	参加者（A）	参加者（大学院のみの在籍者を除く）（A′）	不参加者（B）	学部卒業者（C＝A′＋B）	参加率（%）〔（A′／C）×100〕
～1940年代	11	11	501	512	2.1
1950年代	24	24	137	161	14.9
1960年代	78	78	423	501	15.6
1970年代	69	67	1,610	1,677	4.0
1980年代	51	51	1,689	1,740	2.9
1990年代	43	40	1,388	1,428	2.8
2000年代	46	42	807	849	4.9
合　計	322	313	6,555	6,868	4.6（平均）

資料：駒澤大学地理学科創立75周年記念祝賀会参加者名簿（2005年２月10日現在）（記念式典当日に配布したパンフレットに掲載されているもので、記念式典のみの参加者も含む）、『駒澤大学文学部地理学科創立75周年記念誌』。ただし、1954年以前の卒業者数は『駒澤大学百年史』による。

注１：実際には、参加予定者（A）の中に当日欠席者も少なくなく、また上表以外の当日受付者もいる。

注２：参加者（A）からは同伴者（非卒業者）を除いている。

注３：1945年以前の卒業者数は専門部歴史地理科、1952～1954年の卒業者数は地理歴史学科の総数である。専門部の別科は含めていない。

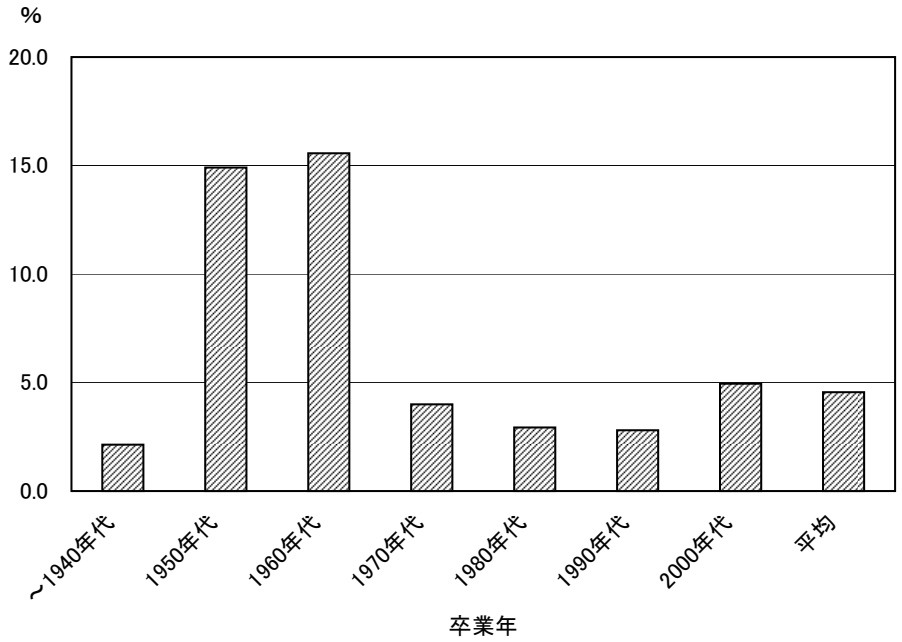

図１　記念式典・懇親会参加率

年度から毎年100人を超えて急増しているので，卒業者数に占める参加者の割合を見ると（表１，図１），全年代の平均参加率が4.6％であるのに対して，1950年代と1960年代の卒業者，つまり現在約60～70歳代がいずれも約15％と飛びぬけて高くなっている（1952～1954年の３年間の卒業者数34名には歴史学専攻の学生も含まれているので，1950年代の値は実際は16％を超える）。この年代の参加が多い理由として，ひとつには，勤務先を定年退職して時間的余裕があるということが考えられる（1940年代以前の卒業者は高齢で逝去者も多く，参加者は少ない）。その他に，具体的な分析は行なっていないが，地理学科卒業後，教職など地理学に関わる職業に就いている人の多いことが，地理学科の記念事業への参加が多い一因になっている可能性もある。また，大学進学率の低かった頃の世代は出身大学への帰属意識が強いとか，学科の入学定員が少なかった頃の世代は学科への帰属意識が強いという理由によって，記念事業への参加が多いとも考えられる。もし，教職者が多いことが参加率の高い要因だとすると，現在は教職に就く新卒者が非常に少ないため，将来，同じような事業を行なっても，参加者が集まらないことが危惧される。

Ⅴ．おわりに

以上，本稿では，駒澤大学地理学科創立75周年記念事業を，地理学に関わる組織の「記念」の一例と位置づけ，「お金」と「人」の面から若干の考察を行なった。そして，大学からの補助金に助けられた面が大きいこと，現在約60～70歳代の卒業生の参加率が非常に高かったことなどを指摘した。

本稿は駒澤大学地理学科の場合の事例報告にすぎないが，同様の記念事業は他の地理学教室でも行なわれており，これからも行なわれるであろう。金銭や参加者に関する資料は普通は公開されないため，

外部者が研究対象とするのは困難かもしれないが，多くの事例を比較検討することによって，国立（公立）大学法人と私立大学の違いや各大学の特色も明らかになってくると思われる[8]。地理学における今後の「記念」研究に向けて，本稿が１つの問題提起となれば幸いである。

注

1）米家泰作「歴史と場所―過去認識の歴史地理学―」，史林88-1，2005，126－158頁。

2）「記憶」が過去の事柄を対象とするのに対して，「記念」とは，必ずしも，ある出来事（事件，創立，独立，誕生，逝去など）からキリのいい年月が経過した後に行なわれるとは限らない。つまり，過去の歴史を記念するだけではない。予想される大きな出来事（創立，独立，誕生以外にも，たとえば退職や新築など）と同時に，記念事業が催されることもある。

3）『駒澤大学文学部地理学科創立75周年記念誌』（駒澤地理41別冊），駒澤大学文学部地理学教室，2005。

4）文献を詳細に調査したわけではないが，筆者の印象では，地理学史の研究の中で，学術活動の経済的側面の考察はあまりなされていないのではなかろうか。ただし，『人文地理学会50年史』では，「会計面の変化」の節が設けられるなど，財政面にも充分目配りしていることも付記しておく。人文地理学会創立50周年記念事業実行委員会学会史編集小委員会編『人文地理学会50年史』人文地理学会，1998。

5）懇親会参加費と記念誌代を合わせて１人１万円，記念誌のみの場合は5,000円とした。

6）これは当然のことかもしれないが，当然でない場合もある。それは，大学や学科が存在しなくなって，現職教員がいなくなった時である。その場合，誰が中心になって記念事業を担うかは，関係者の議論になるであろう。

7）この他に，記念式典・懇親会には参加しないが，記念誌の購入のみを希望する卒業生もかなりの数にのぼった。

8）学科・教室の記念事業は，学部や大学全体の記念事業にも関連しており，大学(史)研究も参照する必要があろう。

On Commemorating the History of the Department of Geography: An example of the commemoration program of the seventy-fifth anniversary of the Department of Geography, Komazawa University

Masayasu ODA
Department of Geography, Komazawa University

In February of 2005, the Department of Geography at Komazawa University held a ceremony and published a book in commemoration of its seventy-fifth anniversary. This paper regards this program as an example of the "commemoration" of the geographical organization, and observes it with special reference to the money and persons concerned. It is pointed out that the financial support from the University was of much help for the success of the program, and the participation rate of the graduates whose ages are at present sixties and seventies is much higher. By comparing these cases, difference among universities and their characteristics can be clarified.

Keywords: commemoration, history, department of geography, Komazawa University